

(平成11年10月10日～12日 奈良市 近畿大学農学部)

園芸学会平成11年度秋季大会では、暖地園芸センターからは、宮本主査研究員(ササユリ栽培)、里村副主査研究員(スプレーギク養液)、そして筆者(スターチス養液)が発表を行った。詳細については、お気軽に試験場まで問い合わせして下さいと考へます。ここでは、今回参加して特に興味深く思っただ試験課題について紹介する。

### 1. カーネーションの花持ちに関する研究 (第4報)花持ち日数とエチレン感受性及びエチレン生成量との関係

小野崎氏ら(野菜・茶業試験場)の、花持ちのよいカーネーションの育種を行ううえでの選抜方法に関する試験である。氏は、カーネーションの花持ちは、エチレン感受性との相関は低く、老化時のエチレン生成量と有意な負の相関があることを解明した。そのことから、花持ちのよいカーネーションを育種するうえでは、老化時のエチレン生成量の少ない系統を選抜していくことが重要であることを示した。近い将来STS処理不要のカーネーションの発表を期待したい。

### 2. ロックウールで栽培したバラの初期生長に関する研究

梶原氏ら(広島農技センター)の行った、アーチング栽培における定植初期の緑枝を折り曲げるタイミングについての基礎データを得るための試験である。試験は、挿し木苗及び接ぎ木苗を供試し、挿し木後15～120日までの地上部と地下部の生育調査を行っている。その結果、氏は、いずれの品種においても、接ぎ木苗のほうが生育が早いことを明らか

にした。また同時に、接ぎ木苗の発根は、挿し木よりも旺盛であることを明らかにし、このことと、台木部の緑枝からの光合成生産物の転流が生育の早さに関係していると考察している。さらなる研究により、挿し木苗及び接ぎ木苗の最適な緑枝折り曲げ時期の解析に発展することを期待する。

### 3. トルコギキョウの高温期定植における吸水種子の低温処理方法と抽だい・開花株率の品種間差異

トルコギキョウの種子冷蔵処理に関する谷川氏ら(福岡農総試園研)の試験である。氏は既報で、トルコギキョウの吸水種子を10℃暗黒条件下で5週間処理を行うことにより高温下でも発芽率と抽だい株率が向上することを明らかにしている。今回の試験では、秋出しを目標とした場合の低温処理温度・期間について検討するとともに、低温処理後の育苗期間及び低温処理効果の品種間差について検討している。その結果、秋出し栽培のための最適な低温処理は、10℃暗黒条件下で5週間であり、その後の育苗は常温で4週間行い、8月上旬に定植することにより苗の抽だい・開花株率が高くなることを明らかにしている。また、低温処理効果の品種間差が大きいため、適品種の選定が重要であることを示唆している。開花株率が90～100%であった品種は、'エクローサブルーピコティー'、'ネールイーチネオ'、'キャンディーマリン'等の27品種であった。本県で導入可能な技術であるため検討の必要がある。

以上3課題の紹介となったが、いずれも、興味深い発表であり続報についても期待したい。

(園芸部 上山茂文)

## 編集後記

新しい1000年が始まる年となりました。1000年先、いや100年先がどんな世の中になっているのでしょうか。考えるだけで夢がふくらんできます。

今年もよろしくお願ひします。

(Y. M)

和歌山県農林水産総合技術センター  
暖地園芸センターニュース No.16

平成12年1月20日発行

編集・発行 和歌山県農林水産総合技術センター  
暖地園芸センター

〒644-0024 和歌山県御坊市塩屋町南塩屋724  
TEL 0738-23-4005  
FAX 0738-22-6903

(この印刷物は再生紙を使用しています。)